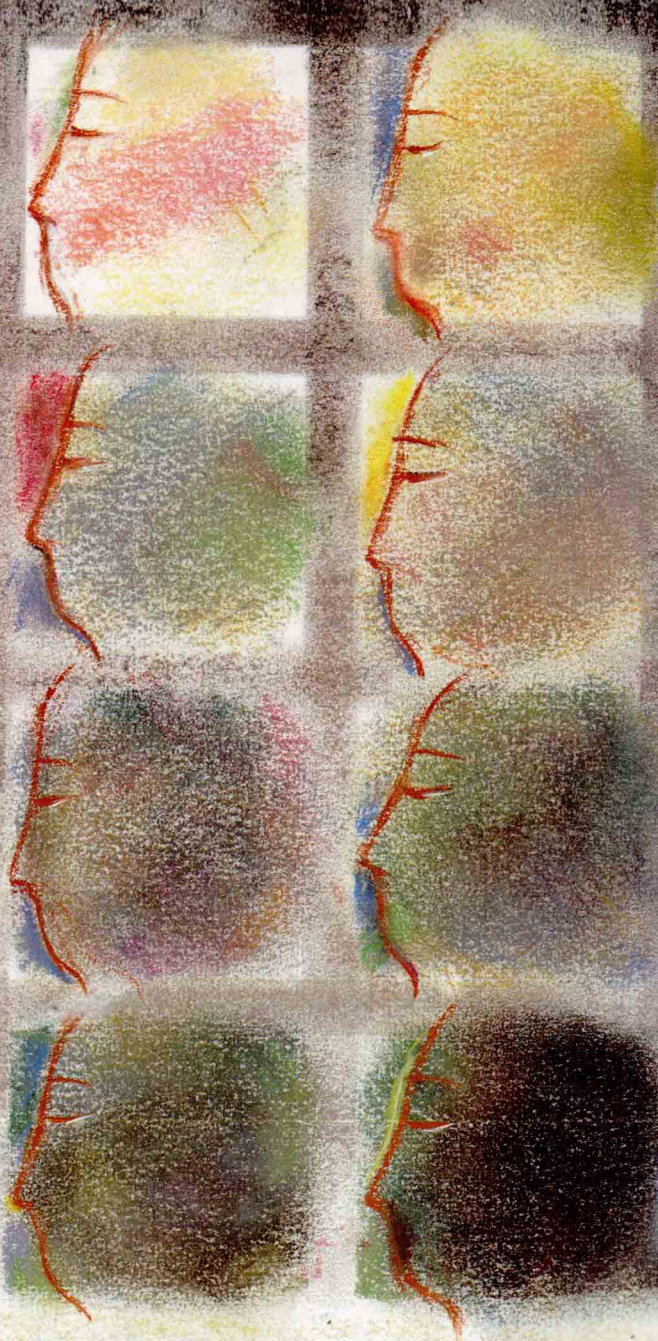


涙^{るい} 痕^{こん}

オンナたちの戦争

千田夏光

汐文社



涙^{るい}

痕^{こん}

オンナたちの戦争

千田夏光

汐文社

著者 千田夏光 (せんた かこう)

1924 (大正13) 年, 大連に生まれる。

毎日新聞記者を経て, 現在, 著述業。

評論・ノンフィクション。

著書 『従軍慰安婦 (正・続)』『性的非行』『暴力非行』

『あの戦争は終わったか』『死肉兵の告白』『皇軍

“阿片”謀略』『オンナたちの慟哭』『天皇と勅語

と昭和史』『終焉の姉妹 (上・下)』など多数。

現住所 東京都江東区亀戸2の6の3の602

るい こん
涙 痕 オンナたちの戦争

同時代叢書

1985年7月20日 初版第1刷発行

定価 1200 円

著 者 千 田 夏 光

発行者 吉 元 尊 則

発行所 (株) 汐 文 社

東京都文京区本郷 1-26-10 中村ビル

電話03 (815) 8421 振替(東京)2-14150

印刷 刈部印刷 製本 東京美術紙工 装幀 オーク

涙^{るい}

痕^{こん}

オンナたちの戦争

●目次●

はじめに

鶴見の女・二人…………… 11

日赤従軍看護婦(1)…………… 71

——ビルマ哀歌

日赤従軍看護婦(2)…………… 93

——波濤悲歌

日赤従軍看護婦(3)…………… 104

——薬殺連歌

白い服の女…………… 117

従軍慰安婦を見た女…………… 133

女の碑……………149

二日市・墮胎病院……………171

二つの眩き……………203

初出一覧

はじめに

“大東亜戦争”の末期近く、熊本陸軍予備士官学校という学校に私は入れられた。入れられたというのは正しくない。

半ば強制とはいえ、下級予備士官を養成するその学校へ自ら志願し入ったのであった。大正十三年（一九二四）生まれ、軍国主義と皇国史観に育てられた軍国少年がみごとに軍国青年へと結実した姿であった。

場所は熊本城内にあり、校舎の柱に“神風連の乱”のときの刀痕があつたりした。

それはいい。下級予備士官とはいえ戦場へ赴けば何十人、何百人かの下士官兵を率い戦闘指揮をとらねばならないのだから、当然のようにそこでは“戦術”“戦闘指揮”の講義があつた。

講義は各中隊長が担当するのであった。私の中隊長はAという、いかにも歴戦の勇士を思わせる鷹のごとき鋭い目をもった三十歳前後の少佐であつた。彼の講義の第一課は正面の大黒板にサラサラと想定戦場の要図を描き、

「これが敵の陣地、諸士は指揮官として兵百名を率いこの敵陣地を攻略することを命ぜられた。と

ころが、敵陣地の左半分は密林地帯、右半分は牧場のごとき原っぱになっている。さて、指揮官として諸士はいずれを通して攻撃するか。決心のついた者から手を挙げろ」

いきなり全員に質問をぶつけることからはじまった。

牧場のごとき原っぱというのは「ゴルフ場のごとき原っぱ」ということでもあるが、そんな所を前進すれば兵隊全員丸見えだからバタバタ倒されるのはわかりきっている。対して密林地帯を行けば樹木が遮蔽物になるのでその心配はない。まずこれが常識である。

「密林の方に進撃路をとめます」

幾人かの常識家が、さっ、と手を挙げそう答えた。この場合の「常識」とは、われわれ幹部候補生全員はいずれも大学・高等専門学校を繰り上げ卒業か在学中に徴兵された、いわゆる「学徒出陣」組だったから、一般大学・高等専門学校の学生としての「常識」ということであろう。

小賢しいのが、

「密林地帯と牧場地帯を出たり入ったりしつつ攻撃前進を指揮します」

小賢しく答えたが、これは一人だけ。他の挙手しない者もすべて無言のうちに、その「常識」にもとづく「密林地帯の前進」を意志表示していた。

ところが、その全員が「落第！」なのであった。中隊長の示す正解は、

「ゴルフ場のごとき原っぱの前進」

であった。ゆっくり論すようにその正解のゆえんを語るA少佐の説明は明解であった。

「なるほど牧場のような原っぱを攻撃前進すれば兵隊はバタバタ倒されるかも知れない。しかし、指揮官として全員の戦闘動作を完全に掌握しつゝ『撃て』『撃ち方やめ』『進め』『突撃』そうした明快な指揮がとれる。戦場において、この明快な指揮を指揮官たる者まず考えねばならない」

より具体的に説明すると、密林地帯を行けば、なるほど敵弾を受けることは少なく、兵隊も死なないかも知れない。しかし、指揮官が「突撃」命令を下したとき兵隊が穴ぐらに潜りこんだり、樹木の陰に身をひそめ命令を拒否してもわからない。

したがって「兵隊がいくらバタバタ死傷しようとも指揮官たる者は、部下全員を完全に掌握し、手足のごとく動かすこと、それを戦場においてはまず考えろ」というのであった。

研ぎすまされた刃のような、その少佐の声を耳におさめながら「なるほど」と軍国青年は思った。私は大連という港街で生まれた。いまの中華人民共和国遼寧省大連市である。すぐ隣街が旅順市で日露戦争（一九〇四―一九〇五）のとき一万八千余人の兵隊が戦死した要塞のある所である。

その二〇三高地という山だけで八千余人が「突撃」「突撃」の繰り返し返されるなかで死に、私の少年時代、山頂に立つと兵隊たちの碎けた白骨片が砂利のごとく土にまざっていた。「満州」の赤土である。

思いはそこに繋がっていったが、中隊長のその講義内容にはいささかの疑問も違和感も抱くことはなかった。

疑問というより、はっきりいってそれが持つこわさを知ったのは昭和二十二年三月、母・姉・妹

が体ひとつで「満州」から引揚げてき、信じていた軍隊から見棄てられたことへの恨みをつらみを聞いてから、沖繩戦における一般住民の屠殺とぎされていった涙ながらの話聞いてからであった。

これらの悲劇については多くの記録が残されているので詳述は避けるが、一言でいえば「満州」においては関東軍が、沖繩においては第三十二軍が、己おのの戦闘行動遂行のため一般人を見棄て見殺しにしたことへの恨みをつらみである。

しかし、熊本で教えられたごとく「戦闘行動遂行のために兵隊の犠牲すら顧みない」のが「軍」であり「指揮官」であるとすれば、兵隊以下の、戦闘行動ひとつとれない一般人を見棄て見殺しにするのは当然であろう。むしろ犠牲を顧みることなく「戦闘遂行」のみに心血をそそぐ、くれた指揮官がそこにいたということであろう。

さらに一般人のうち弱者に分類される、私の母・姉・妹のごとき老幼婦女子から、その見棄てられたなかで犠牲になっていくのも自明ということであろう。

あの戦争中、食糧自給のできないこの国で、まず直接戦力である兵隊に食べさせるべく一般国民に食糧の配給制度をしき、その量を生きるに必要なストレスまで減らし、それも遅配欠配でさらに減らしながら、いささかも顧みることのなかったのも、この発想によってであった。

戦争のことしか考え得ない頭脳構造をもった軍人が政府まで握ってしまっていたからである。ここでわかるのは「戦争のこわさ」とは「軍人的発想のこわさ」であるということだ。

この「こわさ」は決して過去のものではない。

軍人の台頭してきた昭和十三年四月一日、陸軍省が起案した「国家総動員法」なる法律が国会を通過した。社会党、民社党の前身である社会大衆党も賛成した法律で、戦争目的完遂^{かんづい}のためなら国民の生命財産すべてを一片の「勅令」（議會を過ぎず天皇が直接だす法律）でとりあげることができるという超ファッショ法律だった。

軍事基地の近くに防火地帯をつくるため人の住んでいる家を戦車であつというまに潰^{つぶ}してしまうこともできたし、植民地であつた朝鮮で十七歳以上四十歳未満の未婚女性を徴用^{ちようよう}し、そのうち約八万を「従軍慰安婦」にしたのもこの法律によってであつた。

この「国家総動員法」を参考に防衛庁で作成中という「有事立法」のもれてくる内容を見ると「こわさ」が単なる杞憂^{きゆう}でないことが知れるからである。

もれてくるものを綴り合わせると、国会を通り、施行され、それが威力を発揮した場合、かつてと同じ状況がわれわれを襲^{おそ}ってくるのはわかつているのである。

危機的状況下においては、弱者から襲^{おそ}われるという「危機の法則」をもつてすると、老幼婦女子の泣き叫び逃げまどう姿が浮かんでくるのである。私には絶対に過去のものと思えないということだ。

ある歴史哲学者が「過去から学ぼうとしない者は未来から見棄てられる運命にある」といった。再び「あの戦争」下における「弱者」の姿を書く所以である。

鶴見の女・二人

その前日、すなわち昭和二十年の四月十五日は日曜であった。

神奈川県庁防空局記録員が「4月15日、晴レ（暗空）、西後北ノ風8メートル、温度18度、湿度46パーセント」と記しているように横浜は「春の盛り」にあった。

同市の東部を北から南へ流れ東京湾にそそぐ鶴見川つるみの堤防や野毛山のげに、何本かの桜がまだまだ白い花を残していたが、

「おトウさん、今日は日曜だからアメさんも空襲は休みなんですかね」

夫と二人っきりで夕食の膳を前に、助産婦武田ツルが、茶ノ間の窓から空を見上げ呟つぶやきもらしたのは空襲のことだけ。春という言葉も桜桜の噂も一度も出なかった。

横浜市鶴見区市場町。いかにも庶民の住宅街という一廓、四年前に夫婦で力を合わせやっと建てた住居すまいである。

夕食の献立は八勺しやうの米に一合まわの豆粕まめかすを炊きこんだのと、きざんだ大根の葉っぱは数きれが浮かんで

いるおすましみたいな味噌汁と、イナゴの佃煮一人四匹ずつであった。

豆粕とは大豆から油を絞りとった残り滓で、そもそものは肥料か飼料にされるのを主食として配給されていたのだった。以上、まずは当時の日本人の平均的「庶民食」である。

食膳のどこにも「春の香り」や「春の匂い」もない。

しかし、ツルが、いやツルだけでない、彼女の周りの人たちが春を忘れてしまっていたのは、そんな食膳のことからではない。三月十日、東京の空が真っ赤に燃えるのを眼の前に見てからであった。

たしかにそれまで武田ツルたち横浜の市民、鶴見区の区民は幾度か空襲を体験した。

初っぱなは「大東亜戦争」開戦直後の昭和十七年四月十七日である。鹿島灘沖の空母から飛びたった米中型爆撃機数機のうちの一機が頭上を通過したのだったけど、被害らしい被害はなかった。米軍機と知ったのは空襲警報が鳴ってからであり、サイレンが鳴ってもツルは防空演習だろうと思っていたものだ。帝国陸海軍を、いわれるまま信じていたのである。

昭和十九年十一月一日から五日、七日とB 29一機が飛んできたが、はるか上空を白い飛行雲の尾をひき、そのまま再びサイパン基地に戻っていっただけ。「なあに、あんなの神風が吹けばキリキリ舞いよ、ね」ツルは小手をかざし隣組の奥さんたちと見上げていただけだった。

防空壕に入ることもしなかった。十一月二十四日に八十八機のB 29が武蔵野町の中島飛行機製作所の工場を襲ったときも、お隣の東京都の、それも狙われたのは軍需工場だからだと高を括っていた。

た。

翌二十五日未明、横浜市の昭和特殊製鋼、東京製油、帝国農芸倉庫がやられても、まだ身近なものとは思ってもみなかった。

二ヵ月半後の翌二十年二月十九日、生麦^{なまむぎ}にあるキリンビール、日本鋼管、関東配電の被爆したときも同じだったし、おりからの吹雪をつき同二十五日機動部隊の艦載機が関東一円にある日本陸海軍航空基地をたたききたときも、それが数日つづいたときも同じだった。

いずれも軍需工場か軍事施設だったからである。

それが三月十日の東京大空襲から、事情のガラリ一変したらしいことを、一介の助産婦にすぎない武田ツルたちも肌で感じはじめた。

襲われた東京の下町には軍事施設などありはしない。あるのは庶民の住む長屋であり家ばかりである。そこで一夜にして十万の市民が焼き殺され負傷者は数知れぬという。これはアメリカが一般市民を狙いはじめたのだ。

近くに軍需工場はあっても鶴見区は総持寺もある一般市民の住宅街だからと、これまで安心してしたが、これはもういつ襲われ焼かれるかわからないと思いはじめたのだった。大きな声でいうとすぐ「非国民の敗戦思想！」憲兵や特高警察がとんでくるので、夫の信吉にだけ、

「一日も早く鶴見を逃げ出しどこか山奥へ疎開した方がいいかも知れないですね」

声をひそめ語りかけるようになっていたのであった。夫婦で爪^{つま}に火をともしようにし貯えた金で

建てた家だったが、三月十日東京大空襲で下町が燃えたとき火照る熱気は鶴見にも、ろくに伝わってきた。あんな火に責められてはたまらない、あの下は紅蓮の火焰地獄で、生きながら人間が焼かれていたのだと思えば、家なんぞにこだわってはおれない。

死にたくないのであった。

だが、その思いも一瞬のことであつた。

彼女は鶴見警防団衛生救護隊に組み入れられていた。鶴見区の末吉、佃野、豊岡、鶴見、市場、菅沢、栄、生麦、浜などの各町には二万戸をこえる民家があり、疎開しようにも行く先をもたぬ人たちが住んでおり、何十人かの妊婦がいた。たとえ空襲下でもその家にお産があれば駆けつけることを命じられていたのである。

逃げ出したくとも逃げることは許されないのであつた。

四月四日の未明近く、東京西郊の立川市を襲ったB29二百四十機の大編隊が、帰りがけの「お土産」に、鶴見をはさんで東隣の川崎市、西側の神奈川区へ二百五十キロ爆弾をドスンドスン投下していったときも、空襲警報発令と同時にツルは指定された救護隊詰所へ駆けつけていた。

いろいろな空襲警報の前ぶれである警戒警報の発令を告げるサイレンは毎日のことになっていた。硫黄島はすでに米軍の手におちている。正確にいうと、そのツルが「今日は日曜だからアメさんも空襲は休みなんですかね」といったのは、四匹のイナゴの佃煮の最後の一匹を口に入れた直後だったが、この日は午前十時ごろB29の一機がはるか上空を飛来しただけ、それらしい気配はなかったの